

# レバノンにおける 高齢化社会の フィールドワークから 見えてきたこと

池田昭光 いけだ あきみつ / AA 研究機関研究員

アラブ諸国では最も高齢化率が高い（65歳以上が全人口の約8%）とされるレバノン。

宗教的多様性が同国の高齢者の生活に独特の影響を与え、日本の高齢化に通ずる面もみられる様子を紹介する。



## 高齢者施設と宗教

まずは下の写真をご覧ください。とある高齢者介護施設に足を踏み入れると、正面にこのマリア像が据えられているのが目に入る。額装されている写真は、この施設の創設者（右側女性）が福祉活動に対してメダルか何かの贈呈を受けている写真だが、マリア像はそれと比べかなり目立っている。この施設は、直接的に宗教との関係を謳うものではない。とはいえ、創設者、またその後継者はキリスト教徒（しかもレバノンやシリアに独特のマロン派）であり、それならマリア像を置くのも当然だと言うかのように、この像が据えられている。すると、施設としては万人に開かれたものであることを謳いながらも、結局のところ、イスラーム教徒たちはこのような施設を利用しなかったり、最初は利用していてもやがては止めてしまうこともある。施設の中でキリスト教の礼拝が行われる場合には、イスラーム教徒たちは違和感をより顕著に感ずることもある。

その場合に彼らはどうするのかといえば、イスラームの自分たちの宗派（レバノンには主にスンナ派、シーア派、ドゥルーズ派信徒が暮らす）に関連する介護施設をもっぱら利用するのである。あるいは、最初

から自宗派に関連する施設を探す場合もあるだろう。実際、そのような施設が設立されているのである。

レバノンはこのように、社会福祉制度のひとつである高齢者介護施設が、程度の差はあるが宗教との関わりのもとで存在する例が多々見られる。社会の様々な人びとに広く開かれたものとして福祉制度をとらえるならば、宗派別にタテ割りになっているかのようなレバノンの高齢者施設は異様に映るだろうか。だが、暮らしにかかわる様々なサービスと宗派が結びつく場合は他にもあり、病院や学校などがそうした例とされてきた。

## レバノンにおける宗派と社会

他方、中東と聞いてイスラームをイメージする人も多いように、なるほど中東では宗教が高齢者の日常とも密接にかかわるのだと、納得する方もいるかもしれない。レバノンにはイスラームおよびキリスト教の、18の公認宗派が存在すると聞けば、中東の生活と宗教がますます頭の中で結びつきを強めるかもしれない。

ちなみに、レバノンでは宗派によって出生率も違うと考えられている。一般的に言えばキリスト教徒のほうが出生率が低く、イスラーム教徒のほうが出生率が高い。そのことは一般の人びとの家族イメージにも反映されており、「キリスト教徒は子供は一人か二人、イスラーム教徒は五人、あるいはそれ以上」と認識されている。隣国イスラエルと度々紛争状態に陥る南部レバノン出身のシーア派イスラーム教徒が、「我々のところではイスラエルと戦争になるから、みんな若いうちに結婚して早くに子供を作る。いつまた戦争になるかわからないから、先のことなんか考えていたら結婚できなくなる」と語ったように、地域的特性などもあいまって、家族のありかたには宗教の違いも関連する。

## レバノン版「ぼっくりと死ぬこと」？

冒頭の例で示したように、レバノンの高齢化に関する筆者の調査では、高齢者に関連する施設やサービ

\*写真はすべて筆者撮影。



高齢者施設のみを経営していくことが難しい場合、他の事業もあわせて行う。そうした事業として行われているケータリング・サービスのメニュー。施設のスタッフであるデザイナーがデザインを手掛けている。レバノン料理もメニューにあるが、写真が付されているのはフィッシュ&チップス。



オープンして間もないデイ・ケア・センター。



马龙派キリスト教修道院の隣でオープンして間もないホームの部屋。調度類などがホテルのような印象を与える。実際、ホテル経営の経験者がホームの経営に携わっている。「修道士たちでは切り盛りできない」ため、実務経験者が抜擢されたのだとか。

ス、代表的な宗派についてそれぞれ見て回ることがひとつの柱となっている。もうひとつの柱は、高齢者および彼らの家族関係や高齢者施設をめぐる現在のレバノンの人びとがどのようなことを考えているのかを、街中でのインタビューや世間話を通して理解していくことである。これによって、レバノンで進行しつつある高齢化に関する人びとの認識を、より日常的な次元で観察することができるからである。

ある日、調査地間の移動に用いたタクシーの運転手と雑談を交わした際、ふと思いついて「理想の死に方ってありますか?」と尋ねてみた。相手はシーア派のイスラーム教徒である。一般的な理解によれば、イスラーム教徒は、生涯で一度は聖地マッカ(メッカ)に巡礼をすることが宗教的義務とされている。この運転手も、そのような宗教的観点から死について話してくれるのではないかと筆者は予想した。また、そのような返答に半ば合わせるつもり

で、筆者自身の理想の死に方(読経に包まれて死ぬ)についても話してみようと考えていた。ところが先の質問に対して、運転手は次のように答えた。「そうだなあ。仕事なんかしている時に、ただちに死ぬようなのがいい。父親がそうだった。さっきまで隣の部屋で作業をしていたと思ったら、母親が見た時には死んでたんだ。」

これはつまり、日本で言う「ぼっくり死ぬ」に相当する死に方と言えよう。日本人が言いそうなことをレバノン人も口にしたら筆者は興味を覚え、自分自身で用意してきた「読経に包まれて死ぬこと」についても先方に話してみた。すると、「ああ、そういうイスラームにもあるぞ。死にそうになったらシャイフ(大雑把な表現をすれば、イスラームの宗教者)を呼んできてだな、『あなたはこれまでとても良い人でした』といったいい言葉を聞かせてやるんだ。問題は、人がいつ死にそうになるのかなんて、誰にも分らない

ことだな(笑)」と言った。いちおう宗教的な脈絡で応答してくれたものの、他人事として語り、それはこの発言の最後が冗談になっている様子でもうかがえるだろう。人の死という宗教に密接に関わる話題でありながら、ある一人のレバノン人イスラーム教徒の口から語られるのは意外にも、我々にとって少なくとも表面上はわかりやすく見える発想であるというのはどういうことだろうか。

### ヨメとシュウトメ

同様な経験は他にもある。現代の妻は夫の両親の世話を嫌がるようになったということを様々な人々が口にするのである。端的に「今の世の中、ヨメとシュウトメはそりが合わない」と言った人もいる。これまでに様々な施設や人びとから聞き取りを行ったが、宗派および他の側面における多様性にもかかわらず、ヨメとシュウトメの間柄の話は、そうした多様性を貫いて繰り返し聞こえて

シーア派イスラーム系慈善協会が運営するホーム入口に置かれた喜捨用の箱。調査アシスタントを務めてくれたマロン派のキリスト教徒は、こうした箱が要所所に置かれていることに関して違和感を示し、「我々とはお金に関する文化が違うのかもしれない」と感想を述べた。社会福祉の経済的側面に宗教的・文化的違いが関わることを示唆する、興味深い発言である。